

1. 略歴

1987年3月	京都大学文学部卒業（文学士）
1989年3月	京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990年3月	京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990年4月	神戸大学教養部助手
1991年10月	神戸大学教養部講師
1992年10月	神戸大学文学部講師
2000年10月	神戸大学文学部助教授
2000年4月	文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味を中心にあった。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあって、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人々―ハラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで―の営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付けるという作業を進めている。

c 概要と自己評価

二つのシンポジウムでの発表以外では、G.Ch.リヒテンベルク(1742-1799)が30年以上にわたって書き残したノート『雑記帳』*Sudelbücher* 日本語版の編集・翻訳作業に集中した。2000ページ以上の原著をテーマ別に編集し、詳細な注と解説および年譜を付したもので、この規模での刊行は日本初となる（2018年6月に作品社より刊行された）。

ドイツロマン主義・啓蒙主義をさまざまなコンテクストにおいて検討するという年来の研究方針は継続中であり、今期は、1) フランスの詩人ポール・ヴァレリーのリズム論を、ドイツ近代リズム論との関連において検討する、2) ドイツロマン派の作家E.T.A.ホフマンとフランス啓蒙主義の思想家D.ディドロの作品を、固有名の使用という観点からインターテクスチュアルに分析する、という二つの試みとなった。

d 主要業績

(1) 学会発表

国内、宮田眞治「ヴァレリーとリズム―ドイツ近代からの視座」、「日仏シンポジウム 芸術照応の魅力Ⅲ―ヴァレリーにおける詩と芸術」、2017年10月22-23日、日仏会館、23日に発表

国内、宮田眞治「ホフマンとディドロ」、「シンポジウム：名前前の詩学―文学作品における固有名と否定性の諸相」、2018年2月11日、東京大学本郷キャンパス法文2号館113教室

(2) 書評

ヴィンフリート・メニングハウス（著）伊藤秀一（訳）、『美の約束』、『シェリング年報』、第24号、182-186頁、2016.7

Haru Hamanaka: Erkenntnis und Bild. Wissenschaftsgeschichte der Lichtenbergischen Figuren um 1800. 『ドイツ文学』第154号、日本独文学会、265-269頁、2017年6月

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本シェリング協会、理事、2008.10～

国内、日本独文学会、理事、2017.5～